

第3回多賀城市子ども・子育て会議録（要約版）

□日 時 平成26年3月13日(木) 9時30分から

□場 所 3階 第1委員会室

□出席者

委員：増子正会長、磯部裕子副会長、根來宣昭委員、鎌田俊昭委員、中鉢義徳委員、菊地智恵子委員、相澤日出夫委員、河野優子委員、小柳明子委員、大滝淳委員

事務局：片山保健福祉部次長、但木こども福祉課長、伊藤太陽の家園長、沖井志引保育所長、塚野子育てサポートセンター所長、佐藤こども福祉課長補佐、伊藤こども福祉課主幹、徳永こども福祉課主幹、小林こども福祉課副主幹、㈱ぎょうせい

欠席委員：川崎秀和委員、黒川恵子委員、山本宣恵委員、服部典子委員、伊藤光子委員

□次 第

1 あいさつ

2 議事

(1) これまでの取組経緯

(2) 各委員から提出された現状と課題への回答内容

(3) 各事業者からの現状と課題への回答内容

(4) ニーズ調査結果（案）報告

3 その他

1 会長あいさつ

皆さん、おはようございます。年度末のお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

東日本大震災から3年が経ちまして、ここ数日、ちょっと幸せとは何かということを考えさせられることがありました。一般的に幸せとは何かといいますと、一般的な統計では、所得が高い人ほど幸福だと感じる方が多い。それから、仕事を持っている人のほうが仕事についていない方よりも幸福度が高い。それから、結婚している人のほうが結婚していない方よりも幸せだということが多いというのが一般的な統計結果です。

それを今の若い世代に当てはめて考えてみると、所得はどんどん下がっておりまして、ここ30年ぐらいで大体40万から50万くらい所得が減っている。それから、仕事がある人ほど幸福だという方が多いということを考えてみると、非正規雇用が50%を超しているわけです。それから、結婚している人のほうがしてない方よりも幸福だという方が多いということを考えてみると、生涯未婚率が、女性で10数%、男性では20%ぐらいです。さらにどんどん生涯未婚率が高まっています。この一般的に言われている3つの幸せというのを若者に照らし合わせると、全てが外れてしまっています。しかし、幸福かと聞いてみると、30年前よりも幸福だと答える20代の方が多い。ちょっとよくわからないところがあるのですが、この東日本大震災から4年目を迎えて、改めて、復興をこれから担っていく若い世代、それから、次代を担う子どもたち、また生まれてくる子どもたちが幸せだと思って住んでいけるような多賀城市にしていくことが、本当に我々に課せられている課題だということを、ここ数日改めて思っていました。

きょうも盛りだくさんの議事になっておりますけれども、皆さんのお力をお借りしていければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

2 議事

○会長 まず、議事で1番から4番までですが、全て関連事項ですので、1番から4番まで通して事務局のほうから説明をしていただきたいと思います。1番のこれまでの取り組み経緯、それから2番、各委員から提出された現状と課題への回答内容、3番、各事業者からの現状と課題への回答内容、4番、ニーズ調査結果（案）報告について事務局から説明をお願いします。

(1) これまでの取組経緯

資料1に基づき事務局が説明

(2) 各委員から提出された現状と課題への回答内容

資料2に基づき事務局が説明

(3) 各事業所からの現状と課題への回答内容

資料3に基づき事務局が説明

(4) ニーズ調査結果（案）報告

資料4に基づき事務局が説明

【質疑・意見交換】

○会長 ありがとうございます。1つ確認ですが、資料4の1ページ目の調査の概要のところ

で、調査対象なのですが、まず未就学児童用のところで、これは市内在住の未就学児がいる家庭の保護者1,700名とあるのですが、この未就学児のいる家庭というのは悉皆調査ですか。それとも何世帯のうちの1,700名なのか。それと同様に、小学校に通っている児童の保護者1,046名、これが悉皆調査なのか、それとも何人通っているうちの1,046名なのか。同様に中学生も同じです。この数字だけ確認させてください。

○事務局 まず、未就学児に関しましては1,700人ということになってございますが、多賀城市内の未就学の児童が5月1日現在で3,519人おります。従いまして、その約半数の児童を抽出方式で1,700人を選んだということです。通常のアンケート調査に比べますと多くの人数を抽出したと思っております。

それから、小学校の1,046人ですが、各小学校の対象が調査の時点で3,612名おります。そのうち、各学校に協力をいただき、特定のクラスを限定させていただきまして、クラスごとに各学年均一になるように調査をしました。

同じく中学校についても、各学年、各クラスに限定をして調査をしたので、小学校と同じ考え方でございます。中学校に関しては1,907人が当時の対象者でございますので、これも約半数を選んだということです。

○会長 ありがとうございます。大分ニーズや課題も見えてきたようです。

それではここからは委員の皆様には議事の1番から4番までについて、ご意見やご質問など頂戴してまいりたいと思います。お願いいたします。

○事務局 追加で本日欠席の黒川委員からの意見を紹介

○会長 ありがとうございます。黒川委員から寄せられた質問のご紹介をしていただきました。委員の皆様からご意見やご質問等ございますでしょうか。

○委員 このニーズ調査の結果報告書に基づいて、サービス量や今後多賀城市の事業をどういう方向でやっていくのかというのが決まるわけですね。

○事務局 今回の皆様からのご意見であったり、事業者様からのご意見、アンケート結果から見える課題などにより、改めて見えてきた課題を次回までに整理をさせていただいて、その解決に向けた事業や、いかにそういったニーズを満たすための施設を確保していくかという確保方策を事業計画として作成していくこととなります。

○委員 ありがとうございます。

それで、未就学児のニーズ調査の結果報告の、課題や方向性というのは示されていると思うのですが、何かやはりはるか遠くの計画というのを感じていて、1つは例えば、幼稚

園の教育・保育事業の利用について、幼稚園利用率が高い地域と言えます。でも保育所に入れない子どもたちはやはり毎年100人ぐらいつは出ているという現実との整合性ですね。それをどう事業に反映していくのかというときに、現実の課題というのがすごく大事だということを認識していかないといけないと思います。会長さんも子どもたちの幸せにつながる会議にしたいというお話をしていましたけれども、そこをよく取り入れていただきたいなと思いました。そういったことの反映はどのように考えていますか。

○会長 まず、アンケートについては今事務局から説明がありましたけれども、これからサービス量などを考えていくに当たっての基礎資料として使っていくということになると思います。あとは、皆さんから出されたご意見を参考にしながら、これから計画にそれを反映させていく段階にあるのだと思います。事務局いかがでしょうか。

○事務局 そのとおりです。このアンケート調査をもとに、保育の需要量を集計中です。

○委員 これはランダムに未就学児の2分の1をとったということで、現実に待機している人たちとの整合性はどうなのでしょう。

○事務局 もちろん私どもの認識としても、待機児童の解消というのが多賀城市の保育にとって、最も重要な課題だというふうに十分認識しております。ただ、今回のアンケートの目的は、その事業量のボリュームや、必要量がどのくらいあるのかというのをつかむためのものです。国から示された集計シートがあるのですが、それを使用して多賀城市の保育・教育の必要量というものを整理することとしていますので、それがまとまり次第、報告をしたいと思います。

○委員 安易に幼稚園の一時預かりだったり、認定こども園に対する期待ということで事業が流されていないように欲しいと思います。保育所を求める現実的な課題を反映するという視点も大事にしていきたいと思いました。

○会長 ありがとうございます。

多分、この計画をつくっていくに当たって、委員が懸念されたようなことが起きないように、こうしていろいろな方々がこの委員会に出席されておられて、さまざまな意見を述べていただいて、例えば行政が単独で一方的につくらないようにすることが、この委員会の一つの重要な使命なのかなとも思っておりますので、ぜひ今後もいろいろとご意見を頂戴していければと思っております。

そのほか、いかがでしょうか。

○委員 ちょっと申し上げにくいのですが、このアンケートのとり方に大きな問題があると思

いました。

それは、子育てに負担を感じているということについての調査をしていますね。これは表現の仕方によって、数字がすごく変わってくると思います。子どもを育てるのに親が負担に思うということ自体が、私は間違っていることだと思います。ですので、子育ては大変だけれども、どんなふうにして解決していこうとするか、子育てというのは非常に大事な仕事だ、家庭においても行政側から見ても非常に大事な仕事だということを意識させてアンケートをとらなければいけないと思います。

そうしないと、子どもというのは行政側で育ててくれるものであって、親がそんなに責任を持つ必要はないんだという意識を持つ人も出てくるのではないかなと思います。そのような親が増えてくると、子どもが家に帰っても温かさを感じない。そういう家庭になっていくのではないかなと思います。ですので、本当に0歳から小学生に至る子どもたちの家庭環境が非常に悪くなっていくのではないかと思います。

ですので、子どもを育てるのにどう負担を感じているか、どんなことがあるかというような質問の仕方は非常に悪いと思います。なので、このアンケートをつくる前に、作成委員会のようなものを、この委員の中からも交えてつくって、そこで検討をして、その意向を十分に反映してアンケートを作成しないと、偏ったものになってしまうと思います。行政側の立場だけで考えてしまうと、何も意見を言えない子どもたちのお母さんに対する要求を満たすような子育て環境をつくれなくなっていくと思います。いかがでしょうか。

○会長 事務局、いかがでしょうか。

○事務局 以前、委員の皆さんにもお話ししましたとおり、今回の子ども・子育て支援事業計画を従来の次世代育成支援行動計画の中に盛り込む計画なのですが、この設問につきましては、その次世代育成支援行動計画、すくっぴープラン作成の際に、意向調査の中に設けていたもので、今回もその後の変化をつかみたいということで市独自の設問として設定したという経緯がございまして、今回のこのアンケートに加えさせていただいたということでございます。

○委員 その一般的な説明はわかりますけれども、親が負担を感じる、子どもに負担を感じることはよくないことだよというような扱いはしてほしくなかったですね。これは本当に残念なことだと思います。

○会長 ありがとうございます。

社会調査の原則として、誘導させるような設問をしてはいけないということがございま

す。ですから、例えば子育ては大変なのですが、あなたは負担に感じますかというような質問の仕方をしてはいけません。そうすると、子育ては大変だということが、もうその前提で答えますから、みんな大変だと答えるんですね。ですので、そういった極端な聞き方というのはまず原則的にはいけないわけなんですけど、今回の聞き方としてはそういった誘導するような聞き方というのはされていないと思います。ですので、社会調査の手法としては間違った設問の仕方にはなっていないというのが、私の感想です。

事務局としては今回、次世代育成支援行動計画をつくるために、平成17年に作成した次世代育成支援行動計画との変化を見るために同じ設問をしたということでした。変化を見るために同じ設問を入れるということは大切です。しかし、次回、またこの計画が見直しされていく段階のときに、委員がおっしゃられたようなことを十分念頭に置きながら、もっとよりよい実態がわかるような設問ができるように、委員会の中でも調査をするための作業部会とかをつくりながら、設問などを吟味していく必要があるのかなと思いました。私の個人的な感想で申しわけございませんが。

○委員 本当に子どものことを考えると、黙っていられなかったの。彼らは何も発言権も持たないし、意思の伝達の手段も持たないわけですから、お母さんのもとの幸せに過ごせるような、そういう環境があつてこそ、保育所も幼稚園も活きるのだと思います。だから、そういう環境を壊したくないなというのがいつも考えていることです。だから、私は幼稚園で、「家庭に今月はこういう活動をしますよ、家庭だとこういうことが該当しますから、こういうことに協力してください」というお知らせを毎月出しています。家庭づくりをやっています。それを忘れてどんな負担がありますか、負担だと思いますかというような書き方したら、お母さんたちが育たないと思います。ということを少し申し上げさせていただきました。

○会長 ありがとうございます。日ごろそういったお子さん、お母さん方といつも接しておられる委員だからこそのご意見だったと思います。ありがとうございます。

そのほか、委員の皆さん、いかがでしょうか。

○委員 子育てをしていく中での不安感というんでしょうか、この調査結果見せていただいたときに、幼稚園・保育所で30%の方が不安だと、小学校も大体30%の方が不安だという回答になっています。裏返すと、それ以外の方は不安じゃないということです。子育てしている家庭の方が不安はないというほうがかえって怖いなど、この結果から感じました。

あわせて、その不安があるという大体の方は何らかの相談するところに行っていて、

それで解消しているという結果が見えるのですが、反対に不安がないという方は当然、相談機関にも相談しません。そうすると、早ければ早いほど問題の解決というのはできると思うのですが、不安がないままずっと子どもが大きくなって行って、親の手に負えない段階で問題が一気にくるパターンのほうが怖いなと思いました。だとすれば、かえってこの不安がないという7割近くの数で安心するのではなくて、その方の気持ちの中にいつでも相談できるとしてもらおうとか、そういったものにも目を向けていかないと大きな落とし穴になってしまう可能性もあるなというのが一つ感じました。

あともう一つなのですが、中学生の将来に対する不安ということについて、中学生の多感な時期に将来について不安がないほうがおかしいのではないかなという気がします。一番心配が多い時期だと思います。それにしてもちょっと数字が低いのではないかなというように感じて、何んでなのかというのはわからないのですが、その質問の聞き方なのか、それとも対象者だったのか、それとも、多賀城の中学生がしっかり将来像を持っているのかというところはわかりませんが、この数をそのまま受け取ってよいものなのかなという気はしました。

○会長 今、委員のほうから、例えば子育てに不安がないほうが心配だということでしたが、例えばクロス集計の仕方で、不安がない方が例えば相談とかをどうしているのか、それから相談先の情報をどこから得ているのかとか、そういうクロス集計をもう少し集計のかけ方を変えてみてもいいと思います。

逆に今度は委員の皆さんから、これとこれの関係が知りたいというのを、今ではなくて結構ですので、何日か時間を頂戴して、これとこれが知りたい、委員がおっしゃったように、不安がない人はどう思っているのかなとか、こういう部分がどう思っているのか知りたいというような要望を出していただければ、多分クロス集計をかけていただければと思います。

○事務局 そうですね。言うていただければ可能です。

○会長 次の委員会までの日程を見ながら、何日までそのクロス集計の要望を事務局に出せば対応していただけるかということをお示しくください。今は事務局のほうでも基本的な集計しかしていません。皆さんが知りたいことを出していただいて、できる限りそれに対応していただいて次回を迎えるといったことでいかがでしょうか。よろしいですか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○会長 それでは事務局、その辺は後で日程をお示しくください。

ありがとうございます。他に何かご意見がありましたらよろしく申し上げます。

○委員 中学生のニーズ調査結果のところで、自由な時間を過ごすためにあったらいいと思う場所というところで、中学生でひとり落ちついて過ごせる場所という回答が一番多いということでした。

中学生の子どもたちが休みだった日があって、自分の子どもにも、私が仕事から帰ってきて、今日は何をしていたのと言ったら、家でひとりボーっとしていたと言われました。たまにはひとりで静かに過ごしたいみたいなことを、中学校1年生の男の子から言われました。友だちを遊びに誘わなかったのと言ったら、友だちに電話しても、今日はずっとボーっとしていたいと言われたということでした。中学生の男の子が、ひとりで家でボーっとしていたい時間が欲しいというのが、私が子どものころにはちょっと考えられなかったことで、そんなに中学生にストレスがあるというか、そういう時間を欲しいくらいにせば詰まっていた追いつめられていることがあるのかなと思ってちょっとショックでした。このアンケートを見て、自分の子どもだけじゃないんだなと思いました。全般的にそのようになっているというのが、なぜなのかちょっと知りたいなと思いました。

○委員 今の委員の意見とはまた全然違うのですが、さまざまな場所で子育て支援などの活動している中で、先ほど話があったように、お母さん方が子育てが大変だとか不安だとかというところから話が始まります。当たり前じゃないと言うのですが。このアンケートの中にも、経済的負担はあるかどうかというところで、人一人を産み育てるというのは経済的負担が増えていくのは当たり前というお話しをするのですが、何か不安とか負担というのが先にたっているところが感じられるなど、多賀城だけではなくてどこの地域でもすごく感じます。

多賀城市の場合は、NPOや市民グループが極端に少ない地域の中で、幼稚園の先生方や保育園の先生方がそういう基盤を何とか保とうとしていただいているというのが、このアンケートを見ても、通っている方々の数値とかを見ても分かります。そういった地域基盤をこれからつくり上げていく場がこの会議などなのかなと思いました。仙台市の隣なのに、地域づくりがまだまだこれからなところが、先ほどの中学生の問題とか子育てへの不安を持っているというところにつながっていくのだな感じました。多分皆さんも様々な経験値から、この回答の裏にはこういうことあるのではないかなと思って見てらっしゃるのだらうかなと思っていたので、見方の違いを数値化していただけると、より具体的に比較検討していけるので、貴重なアンケートだなと思って、有意義な時間だなと思っていました。

○会長 ありがとうございます。

ちなみに、何かで読んだことがあるのですが、少子化について、子育てが負担になるとか、こういうことを報道しているのは日本ぐらいらしいです。だから子育てというのは大変だとか、お金かかるとか、負担になるとかというのが、若い世代に植えつけられているみたいなんですね。報道の仕方もすごく悪いみたいです。ほかの国では、子育てはお金がかかるよとか、ストレスになるよということがそんなに報道されていないらしいです。

○委員 フィンランドとかあちらのほうは、いかに子育てが楽しいかというのが基本なので、それは仕方ないのかなと思います。

○会長 子育てが楽しいよというのを、何か発信できるようなことを、計画の中にも入れていくべきなのだと思います。

○委員 楽しさの中にはやるべきこともあるし、それはしっかりとやっていかなければならないというところも入れていかないと、人にお任せすればいいんだというようなことはちょっと違うなというのは、ずっと子育て支援やってきて、10年目ぐらいから変わってきてしまったので、そろそろ保護者の方々にも、大変なのが当たり前という気持ちを持っていただくことが、次なるこの世代に向かってのベースになるんじゃないかなと思います。

○会長 ありがとうございます。ほかに皆さんいかがでしょうか。

○委員 今回このように苦労されて、アンケート調査を集計したわけです。当然、これは各自自治体の集計を国で集計して、国の子ども・子育て会議に反映されると思いますけれども、いずれにしても、国の動向を見きわめながら、各県を初め自治体が進んでいくと思いますので、早め早めに進んでいただきたいと思います。各地域の特性がございますので、多賀城市は多賀城市独自の方向性を持って進めるように、この子育て会議を進めていきたいと思います。

一番最初を見てみたら、どの年代までこの子ども・子育て会議の対象にしているのかと一瞬思いました。アンケートは中学生までやっているのですが、特に国関係の資料等をいろいろ見ますと、どうも幼児期を対象にしているようですが、やはり地域で子どもを育てるというのは、その地域に子どもが魅力を持って、これが小学生、中学生、さらには高校生、大学生、社会人となっても、地元に貢献したいという気持ちを育てる、あるいは、東京の大学へ行っても多賀城に戻ってきて、多賀城のために何かやりたいと思うように、やはり幼児期から育てていくことが大事だと思います。確かに社会情勢も変わり、親御さんが子どもを育てるのが大変、負担だと思ってしまう世代になってきましたけれども、やは

り根本的には地域を愛する子どもを育てることが、この子ども・子育て会議の一番の理念じゃないかと思いますので、この会議の中で、そういう条例をつくるのがいいのではないかと感じました。

○会長 はい、ありがとうございます。そのほか、いかがでしょうか。

○委員 表の見方が難しいなと思ったところがあるのですが、事業の満足度というところが何か所かありますが、例えば未就学児用の27ページ。この満足が2点でやや満足が1点で、表にした時の満足度が0.08だったりしています。これをどう見たらいいのか、何か数が低くすぎて、いいのか悪いのかよくわからないという感じですけど、もう少し詳しく説明していただきたいなと思いました。

○会長 事務局、よろしいですか。

○事務局 満足度が確かに0.08というとちょっと低いなという印象がございますけれども、手法といたしましては、ここに書いてあるとおりなのですが、まず保育サービス、あるいは幼稚園サービス、それぞれの項目に対しまして、満足しているか、やや満足なのか、それとも不満なのか、やや不満なのかということを、それぞれに対して1つずつ丸をしていただいております。満足と回答された方は、2点という点数をつけまして、回答者全部の合計を出して、それを回答者数で割っている数でございます。

ですので、平均で0.08とございますが、ゼロを超えていれば不満と回答された方よりも満足と回答された方の割合と申しますか、度合いが高いというふうに見ただけだと申します。ですので、マイナスがついているというものに関しましては、満足と回答された人よりも不満を感じていた方の割合、度合いが高い。やや不満よりも不満のほうが点数低くしていますので、やや不満は少ないけれども不満が多ければ、その分満足度が下がるという形で点数化をしております。

同様に、重要度に関しまして、より2に近いほうが重要度が高い。より重要と回答された方の割合が高いというふうに見ただけだと申します。ですので、重要度2に近い数字ばかりが並んでいれば、余り重要じゃないというふうに回答された方はそんなにいないということになります。

○会長 すみません、私のほうからよろしいですか。

おそらくこの図の見方を説明しないといけないのではないのでしょうか。委員が疑問持たれるのはそのとおりだと思います。

ここでは、100点とか0点というのは余り考えないでいただいて。これの取り方を少

しだけ説明すると、1.5点だろうが2点だろうが、そこを問題にしないでいただいでいて、平均値が例えば資料5の27ページだと1.60になります。これは平均値です。得点は皆さん満足しているというのが2点、満足してないというのがマイナス2点だということです。これで平均値を出すと1.60です。

○委員 重要度がですね。

○会長 重要度の平均値がです。次に、同じ資料の満足度の平均値はマイナス0.07です。そして資料5の27ページの図表中、右上のエリアにプロットされている項目は、重要だと思っている方が平均よりも多く、さらに満足している人が平均値を超えているので、これはとても重要であり、満足している人も多いということになります。ここにプロットされた項目は、重要だけれども満足度もそれなりに高いということで、現状のままでもあまり問題がないということになります。

問題となるのは図表の右下の部分になります。重要だと思っている人が平均より高いけれども満足している人が少ないということになります。ですので、ここにプロットされた項目は、見直しが必要な項目ということになります。

左上にプロットされたものは、重要度は平均値を割っているのですが、余り重要だと思っていないけれども、満足度は平均値を超えているので、現状を維持していけばいいという項目になります。

左下にプロットされたものは、重要だとも思っていないし満足だとも思っていないということになります。ですので、ここにプロットされた項目は、事業の廃止も含めて根本的に考え直す必要があるということになります。

そのようにこの図を見ていただいて、点数が2点だから高い低いとかという見方ではなくて、そのように解釈してみてください。

例えば、27ページを見ていただくと、重要だという平均値を超えているのが右側で、その中で防犯や虐待防止、仕事と子育ての両立の満足度が低くなっていますので、この部分が問題だということになります。そのようにこの図を見ていただくと、理解しやすいと思います。

○委員 平均値の値として見ても、やはり低いのかなと思います。そういう見方は違うのですか。

○会長 ここでは数値の数の大きさ、小ささではなくて、図で理解してみてください。

○委員 捉え方ですね。これを図表で見ると、やはり幼稚園のサービスはいいんだなという

のを思いながらも、保育所のサービスはこの満足の範囲に入っていていいのかなと思っていました。

○会長 これは事業評価の一つの手法としてよく使われる事業評価の手法なので、それに当てはめてみたらこの様になりましたということ程度の理解で良いと思います。

○委員 程度ということで理解します。

○会長 そのように受け取っていただければと思います。この様にすると、何がうまくいっているのか、どこに力を入れていかなければならないのかというのがわかりやすい手法なので、政策評価など様々なことで使われている手法です。

○委員 会長からの説明で、このデータをどう読むかというところは、説明いただいたとおり、いわゆる傾向を見るというか、私たちが抱えている課題の傾向はどうなっているかという見方をすればよいのだと思いますが、資料5の27ページの表中で、保育所サービス、幼稚園のサービスの2つが、他の項目と種類が違うような気がします。

特に保育所の園長先生、それから幼稚園の園長先生は、その2つの項目について、自分の施設の評価のように見えるので敏感に感じる場所があるのではないかと思います。「サービスについて」というような質問だと、ニーズに対してどう応えてくれるかというところで判断されてしまいます。

例えば幼稚園の給食サービスで、給食をたくさん出してくれる園はサービスが良いと捉える人に、お母さんがお弁当をつくることの大事さを指導しようとする、それはサービスという点においてはマイナスだと捉える。例えばバスをたくさん出しているところはサービスが良いと捉える親もいれば、親が手をつないで登園することの大事さを主張しようとする、サービスがよくないと捉える方も出てきます。この数字で見えているところ、その背後にある具体は、別路線で見なければならぬと思います。

客観的にどのような傾向かを見る意味では、このデータはある種わかりやすい。しかし、具体はどうなのかというところは、まさに幼稚園や保育所の園長先生方や先生方が日ごろ取り組んでいることと、保護者のニーズとサービスと、それから必要性和私たちが本来向かっていくべき方向というものを上手に分析する必要があります。単に数値だけを見て判断してしまうと、親が何もしなくてもサービスさえよければ、それで本当にいいのかとなってしまうので、ニーズとサービスと必要性和、本来私たちが向かうべき子育て支援や親支援、家庭をどう育てていくか、そういう具体について、私たちはこの数字を見ながらも一度、その背後にあるものは何なのかということもあわせて読み取っていくことが重要

なのかなと思います。

数字が出せることと、数字では出てこないことがあるので、特に人が絡む問題というのは、単に生産量がどうかとか、価格がどうかという数字とはまた違う複雑な問題というがあるので、そのところを私たちは、客観的に、しかし丁寧に見ていくということをしていかなければならないと思いました。

○会長 ありがとうございます。

○委員 私は保育園の評価が低いとか、そのようなことを言っているわけではありません。サービスとして不足なことがあれば取り組んでいきたいという思いがあったので。事業に直接かかわってくるデータですので、その数値の見方で事業の取り組み方に違いが出てくると良くないと思ったので、そこをしっかりとどのように見たらいいのかという聞き方をしました。この表を見て幼稚園はよくて保育園はだめだとか、そんなことは全然思っていません。客観的な傾向ということで見るとということで、わかりました。ありがとうございます。

○会長 ありがとうございます。

委員からもお話があったように、例えばその背景にあるのが何なのかということ、これから十分に精査して、計画の中に入れていくことが必要だろうと思います。

そのほか、皆さんいかがでしょうか。

○委員 最初に戻るのですが、未就学児童に対する子育ての負担感がとても高いということで、その親御さんは自身が虐待しているのではと感じることもある割合も高いということですが、それは虐待という観念ではなくて、やはりしつげだと思います。そのように感じているということ自体、ちょっと問題があるのかなと思います。

何を言いたいかといいますと、やはり社会人になって恥ずかしくない子どもに育てたい、それが親御さんの願いだと思います。

実際に、私の会社の話しなのですけれども、過去に私の部下で、何人か会社を辞めた社員がおります。若い社員です。いろいろ失敗をしたりして、その都度励まして、いろいろしたんですけれども、結果として辞めてしまいました。辞めた若い社員からいろいろ話を聞くと、親御さんが余りにも自分の人生のレールを引いてしまうので、その上に乗ったまま、大きくなってそこから脱線することなくそのまま育っているのです。そのようなことで、確かに高学歴で頭は良いですけれども、結局それ以外の人からは逆に阻害されるような人間になってしまっています。

やはり子育てというのは大変で、いろんな定義がありますが、最終的には冒頭に会長がおっしゃったように、会社へ入って、高収入で、結婚して、子どもができてと、それが理想なのでしょうけれども、現実的にそういうレールを引いてしまう親御さんの中にはいて、なかなか社会に通用しないお子さんも多いので、そういった支援をもう少し充実させてやるというのは大事なことだと痛感しました。

○会長 ありがとうございます。

基本的なしつけ、マナーについて、そういったことを重視していきますというようなことが、計画の中に必要なのだろうと思います。

そのほか、いかがでしょうか。

○委員 資料5の27ページの表の中で、重要だけど満足が得られないというところで、仕事と子育ての両立の実現に向けた環境づくりについて、これは本当に大切だけど満足度が低いというのは、なかなか厳しいところなのでしょうが、やはりこれがきちんとされてないと、先ほどの子どもを育てるのを負担に感じたりということが出てくると思います。

私も自分の会社のことなのですが、所員はみんな女性です。結婚して子どもがいたり、結婚だけしてとか、あとはシングルマザーでという人もいます。

その人たちが、結婚して子どもを出産するときに産前産後の産休を取ります。私も実際に、今の会社のとときに3人目を産みました。そのときは出産の前日まで仕事をしてました。次の日に子供を産んで、1カ月したらもう仕事に戻るみたいな感じでやってきました。

確かに出産をするときには休んでほしいという気持ちもあるのですが、大きい会社でしたら福利厚生などもきちんとしていて、私どもも福利厚生はそれなりにしていますが、休まれるとやはり実際に働き手がいなくなってしまうので、会社側の経営状態的なところがあります。その辺を所員たちもわかってくれて、頑張ってくれています。なので、会社側の立場、子どもを産んで育てていく立場という両方の立場を味わってみて、すごく難しいなと思います。

そういった問題はやはり家庭だけ、会社だけでは賄い切れないところがあるので、市だったり県だったり国だったりとかでも、少し何か考えていただけるようなことがないのかなとか思っています。これからも新しい所員が入ってきて、これから結婚して子どもを産むというときに、会社側としてどのようにしてその所員の手助けができるのかなというのが、頭が痛いところでもあって、少し考えていただければいいかなと思いました。

○委員 やはり帰するところは、家庭がどうあるべきかということではないかなというふうに

思います。お母さんたちが2人、3人とお子さんをお持ちになったら、今の福祉関係の制度では、お金が出るようになってきているのですよね。それが拡大していったら、子どもを産めばそのお金がもらえて、安心して子どもを育てられるという環境をつくってあげて、楽しい家庭づくりをしていかななくてはいけないと思います。

私は防犯関係のほうでも会議に出ています。それで、ステッカーを車に張って走らせて、夕方によく走るのですが、何回か外にたむろしている子どもたちのところで車を停めて、もう6時ごろになってきているから、日は長くなるんだけれども、もう帰らなさいよと、そういう意味のことをよく話しかけます。そうすると、家に行ったら誰もいねえもんと言うんです。つまらないと言うんですね。そういう答えがすぐ返ってきます。友だちとしゃべっていたほうが楽しいということなんですね。ということは、家庭を心のよりどころにしていないということになるでしょう。そうすると、お母さんにしてみれば、やむを得ず働いているわけなんだけれども、お金のほうが大事なのか、自分も大事なのかということ、子どもは暗黙の何か疑問を持っているのだと思います。

ですから、この多賀城の地域として、そういう家庭を温かい家庭にするためにどうしたらいいかということも、やはり福祉の一つではないかなと思います。だからそれを考えて、この保育事業も進めていかれたらどうなのでしょう。これは欠かせない問題だと思います。

○委員 今回の設問に1つだけワーク・ライフ・バランスのことが入っていたと思うのですが、私どもも、働くということが果たして何のためにというようになるところに行きついていて、やはり子育て支援を考えたときにワーク・ライフ・バランスを絶対セットで考えていくべきだと思っています。子どもが産まれたら施設利用が無料になったりというのがたくさんありますが、その前に、その方にとって働くということとか、子どもを産み育てるところのバランスをどのようにしていくのかということのを、保護者が考えていく機会の何かベースができれば、多賀城らしい形になっていいのかなと思います。中小企業の方もたくさんいる地域でもあるので、全体で家庭のことを考えていけるような道があるといいのかなと思います。企業にとってもいいと思います。

日本だとワーク・ライフ・バランスはまだまだこれからで、まだ10年目ぐらいです。欧米だともうある程度それが確立されているので、日本の中でどのようにそれをつくっていくかというのが、今からじゃないかなと思っています。設問で入っていたので、ああよかったと思いつつも、もう少しこの中でも話をしていければいいのかなとすごく思いました。

た。

○委員 家庭というものを大事にする政策というのが欲しいですね。

○委員 そうですね。

○委員 私も学生時代から、いろんなものを書いて統計などをやってきたのですが、一番恐ろしいのは数の魔力だと思います。幸い、数の魔力の奥に何が潜んでいるかということが今話題になっていて、すごく安心しています。極端な話、1と2足して1.5だとか、そういう数の出し方をよくやるものもいるのですが、そうではなくその裏、背後で議論になっていることが、話し合いの中で入ってきたのはすごくよかったなと思っています。

他の市町村の子ども・子育て会議では、こういう話題にならないそうです。いつも技術論、それから補助金はどう出すかとか、いくら引き出すかとか、それぞれの立場、幼稚園は幼稚園、保育所は保育所で、いかにそういう立場でお金を引き出すかという話ばかりだそうです。しかも、現場に立っている園長先生方、あるいは先生方が委員にいないくて、例えば私立幼稚園はたった1人で、民間の保育所もあまりいない。有識者が圧倒的に多いようです。だから、ここで話題になっているようなことにならないで、今話題になったように、子育てをどうしようか、家庭をどうしようかというほうに議論を持っていこうとすると、行政サイドでは別なほうに議論を持っていくということをちょっと聞いたものですから、非常にここの会はいいなと思って伺っていました。

○委員 先ほど委員がおっしゃったように、各家庭のしつけとか、あり方みたいなものがきちんとしていなければというところで、何のために働いているかとかということもあったのですが、うちの長男が今度24歳になって、結婚すると言っていたんですね。奥さんになる人が今仕事をしている人で、仕事をどうしようかと考えているときに、お母さんを見ていたから、俺は仕事をして子どもを育てているという人がすごくいいと思うので、奥さんには仕事をしてもらいたいと言うんです。すごくうれしかったですね。何か一生懸命子育てをしてきて、息子がそのように言って奥さんを選んだということは、何か自分の子育てが間違っていなかったのかなと思いました。

○委員 こういうのがワーク・ライフ・バランスなんですよ。

○委員 それはやはり地域の方だったり実家の協力や、あとは多賀城市の援助とか色々なものがなければできなかったことですが、でも息子からこの前そのような話をされたときに、何かすごくうれしくて。子育ては大変ですが、やはり自分なりに頑張ってきたつもりでしたので、何となく「よし」って感じがしてます。

○委員 恐らくお子さんがお母さんの生き方を通して、自分で認識しているかしてないかは別問題として、親戚の方やおじさんおばさんとか、おじいさんおばあさんがチームワークをそれとなく組んでいたから、子どもたちは働くお母さんっていいものだったのではないのかと思います。

○委員 私は子どもたちにすごく負担をかけていたと思っていたので、夜遅ければ自分たちでごはんの用意をして自分たちでごはん食べなければならなかったりとか、掃除でも洗濯でも子どもたちにも分担するようにさせてきて、何かすごく子どもたちに負担をかけてきたと思っていたんですけど、子どもたちはそう思っていなかったのかなと。

○委員 あるいは生きがいったかもしれないですよ。

○委員 そのほかのところで親子のきずなというのをしっかり積み重ねてきた結果じゃないかなと思います。

先ほどの話で、仕事と子育ての両立の実現に向けた環境づくりというのが、重要度が高くて満足度が低いとありました。だとすると、ここからまず手をつけるということになったときに、ハード面というのでしょうか、各家庭、子育てをしている家庭に補助金を出すとか、保育所、幼稚園の設備を広げて待機児童をなくすとか、それはお金かかりますけど可能だと思うのですね。

ただ、先ほどのアンケートのご意見とか理由を読ませていただいたときに、ほかの地区から転勤してきて多賀城にきた方が、前の地区はすごくよくしてくれたのに多賀城の子育てはというのがありました。それなら、その方が前と違ったところを補うための自分で何らかの努力なりをしたのかなというのをすごく思いました。

要は、それ以上のものを常に求めている方であれば、どんな支援をしても満足度というのは上がらないと思います。ところが、残念ながらそういう方が学校でも少しずつ多くなってきているというのが現状です。だとすれば、ハード面の支援をしながらも、街全体として子育ての楽しさや家庭の重要性というの、並行して、あるいは先行して啓蒙していかないと、街としてどんなに頑張ったとしても満足度が上がらないという結果になってしまいかねないと思います。要は一人一人の気持ちの持ち方だと思います。

○会長 先ほど、他のいろいろな委員会に行くと、なかなかこういった議論がなされることがないということをお聞きして、それが印象的だったのですが、委員の皆さんから色々な意見を出していただいて、数字からだけではお話しできないようなところの話ができる。こういう子ども・子育て会議を、例えば今回の計画づくりが終わってからも継続させていく

ということを計画書の中に入れるということは、すごく意義があることなのかなと思いました。

計画の中に子ども・子育て会議を常設すると入れれば、1カ月に1度なのか3カ月に1度なのかわかりませんが、皆さんが意見を出し合いながら、本当に必要なものは何なのかということが、会議の中からつくられていくような気がしました。

○委員 私たちがここに参加している意味というのは、自分の所属している保育所などの意見を反映していくということだと思っています。そういった意味では、先ほど、他市町村と比較してより良いものを求め過ぎているのではないかというお話がありましたが、それはいい条件の中で生活したいという点では当然なのかなと思いますし、いくら自治体が頑張っても満足度が上がらないという水準までは、多賀城市はまだいっていないと思います。

保育園のほうに一日来ていただくとわかりますが、待機児童が多いので一時保育は満杯ですし、それから障害を持ったお子さんも待機児が多いので保育園に入れなくて、更に職員の加配をしないと受け入れられないので、何とか保育士を集めてきてやっている。そういう一人一人の現実というのは本当に大変ですし、以前の会議で、次世代育成計画を立てて、保育所を民間に委託するということとかはありましたけれども、待機児をどうしていくのかということや、困ったことに対する具体的な措置というのはなかったですね。障害児も、入るところがなくてファミリーサポートセンターの有料1時間のサービスを利用しなくてはならなくて、一時保育に来てもし一時保育で預かる程度の障害じゃなかったりします。そういう本当に困っているところに、現実にも目を向けた会議でないと、子育てのあり方だけを論議したんでは、私たちの役割も半分になってしまうのではというふうに思います。

○会長 ですからまさに、子育て会議を設置することを次世代育成計画などの中に入れていただけると、いろいろな意見交換がされて、他の人ではわからなかったこととかが分かってきて、本当に必要なものは何なのかなということが導いていけるような気がします。

○委員 家庭が充実して、子育てのあり方が充実してくると、保育所も数の点で余裕が出てくると思います。余裕が出てくるとニーズにある程度応えることができる環境というものが還元してくるのではないかなと思います。子どもさんたちは保育所、または幼稚園に入って、家庭を空っぽにして、お母さんたちは外に出なさいというようにすると、保育所は対応し切れないと思います。それからもう一つ、そのように子育て支援を進めていたら、本当に子どもの生活環境が悪くなっていくような気がします。だから、やはりある程度の家

庭というものを育てておいて、保育所または幼稚園というものをそこそこで活動していったならば、先ほど委員がおっしゃった問題も解決できるような気がいたします。

○委員 先ほど委員からご指摘いただいて、少し言葉足りなかったなと思ったものですから補足させてください。決して現在の多賀城市の子ども・子育て支援が満足されているものではないということは認識しています。しかしながら、例えばこの場で話し合って、これをしていきたいと思いますということで、行政側が中心となって進めたとしても、私たちが満足した以上のものを保護者の方が、あるいは子育て真っ最中の方が求めてくる現実がありますよということをお伝えしたかったのです。

○委員 この子育て支援事業というのは、0歳から連続してさまざまな環境にあるお子さんが幸福感を持てるような支援ということで、今までのように保育所、幼稚園ということだけではなく整備していく事業なので、やはり何か企画したりとかというのではなくて、その人が求めていることをキャッチできるような制度になっていくといいなと思っています。

それと、本当にそういう困っている人たちと毎日接したりしていると、何でこんなにスピード感がないんだろうというようなことを思いますし、例えば、障害を持ったお子さんが、学校に行ったらどうするかという悩みなどを聞いていると、漫然としてられないなという思いでいつも会議に臨んでいるので、指摘するような言い方になって申しわけありませんでした。

○委員 私は仙台のほうでも事業をやっているのですが、働くお母さんたちが保育所にそのまま入所継続できるように、仕事はやめたいけれども就労証明書を書いてくださいと言われることがあります。子育て支援をやっているのに、そういうこともやってくれるだろうと言われてたりします。でも現実には、そのことによって、障害のあるお子さんを預かる枠が減ってしまったり、色々影響があるので、保護者のモラル教育というか、啓蒙をしていかなければいけないなというのを身近に感じています。本当に生活に困窮して働いているわけではないけれど継続してその枠が欲しいから、私くらいいいだろうという方と実際にやりとりをしているので、何か矛盾を感じています。実際にそういうことを言われたら、何言ってるのと返しますが、そういうこともやはりあります。

○会長 ありがとうございます。

それでは、時間も2時間を過ぎまして間もなく12時になるうとしておりますので、ご意見はまだまだあると思うのですが、一旦終了しまして、先程のクロス集計の追加のことや、皆さんから出し切れていない意見があると思いますので、次回の日程、そこから逆算して、

クロス集計の要望をいつまで受け付けるとか、さらにご意見やご感想を寄せていただくような期間を設定したいと思います。

○事務局 貴重なご意見をいただいたところですが、まだ言い足りない、あるいは今から出てくるようなご意見もあるかと思しますので、そのご意見につきましては、3月末日までにご意見をいただければありがたいと思っておりますが、皆さんいかがでしょうか。

○会長 よろしいですか。

では、クロス集計の要望や、追加の意見については3月31日までに事務局のほうに出していただければと思います。クロス集計については次回の委員会までに事務局で対応していただくということにしたいと思います。

それでは、一旦議事は終了とさせていただきます。

そのほか、委員の皆さんから何かございますか。よろしいでしょうか。それでは、続いて3番目「その他」について今後のスケジュールを事務局のほうからお願いします。

3 その他

資料8に基づき事務局が説明

○会長 ありがとうございます。それでは後は事務局のほうにお返しします。

○事務局 議事進行ありがとうございました。委員の皆様、熱心なご議論ありがとうございました。

次回の会議ですが、4月22日火曜日、1時半から行いたいと思います。

4 閉会挨拶 副会長

皆様、長時間にわたりまして活発な議論をいただきまして、まことにありがとうございました。

本日は、この膨大なアンケート調査の資料をまとめいただきました多賀城市の方には、本当にお疲れさまでしたと申し上げたいと思いますし、またこれを踏まえて、委員の皆様からは、それぞれの立場で貴重なご意見を頂戴いたしました。数字で見えてくるもの、それから、数字がひとり歩きしないように、私たちはきちんと実態を見ていきましょうということが確認できたのではないかと思います。数字で見えてくるところと、また自由記述のところを見せていただきますと、本当に貴重な意見もたくさん書かれておりましたので、

私もこれを持ち帰ってじっくり読ませていただきたいなというふうに思います、私たちはここに集まった委員としてこれらの生の声を受けとめながら、そしてそれぞれの立場の、これまでの経験や知識をみんなで提供し合いながら、良い会議にしていきたいと改めて思いました。

中学生の意見を読ませていただきまして、思春期の中学生らしい斜に構えた意見が書かれている一方で、多賀城市を平和で明るい市にしていきたいと、日本中に知れ渡るような、そういう市にしたいというようなことが書かれているのを、非常にうれしく思って読ませていただきました。こういった市民の皆さんの声を大事にしながら、ますますこの会議が有意義な会議になっていくように進めてまいりたいと思いますので、今後ともご協力いただければと思います。

本日は長時間にわたりまして議論いただきまして、ありがとうございました。

○事務局 以上をもちまして、第3回多賀城市子ども・子育て会議を終了させていただきます。